

ウダヤナとプラジュニヤーカラグプタ

—— *Nyāyavārttikatātparyapariśuddhi* に引用される
Pramāṇavārttikālamkāra の断片に関して——

江 崎 公 児

0. *Nyāyasūtra* (NS) 1.1.5 に対する、ウダヤナの *Nyāyavārttikatātparyapariśuddhi* (NVTP) は、NVTP に先行する彼の著作 *Ātmataṭtvaviveka* (ĀTV) からの引用を含んでいる¹⁾。当該の ĀTV と NVTP には、共通して、ジュニヤーナシュリーミトラの *Vyāptīcarcā* (VC) からの引用が見られる²⁾。ĀTV には見られないが、NVTP では、VC からの引用の直後にプラジュニヤーカラグプタの *Pramāṇavārttikālamkāra* (PVA) からの引用が見られる。NVTP では「PVA に曰く」という形で偈が引用されるが、その偈は PVA 刊本に見られるものとは若干異なっており、ラトナキールティが *Īśvarasādhana-dūṣaṇa* (ISD) において引用するものとほぼ一致する。

ウダヤナやラトナキールティが引用する PVA は、PVA 本文では、主宰神批判における文脈で述べられているが、当該の NVTP では、主宰神批判とは全く関係の無い文脈で引用されている。では、どのような意図をもって、ウダヤナは PVA を引用するのだろうか。本稿では、PVA に先立って引用される VC における ‘sv-abhāvavāda’ (「[事物の] 本質を語ること」) をキーワードにして、ウダヤナが NVTP において PVA を引用する意図を明らかにする。

1. 当該の NVTP は以下の通りである³⁾。

【仏教】まず、壺は、自身の非存在の欠如を本質としていることがプラマーナによって確立されている。そのような性質を持つ（即ち自己の非存在を本質とする）ものとしては、決して認識されないからである。これだけのことによって、それ（壺）の非存在も、〔壺の非存在の非存在を本質とするものとして認識されないから〕壺の欠如を本質としていることが確立される。

【ニヤーヤ学派】それは正しくない。壺の非存在が、それ（壺）の欠如を本質としているとは暫定的にも認められないからである。また、或るもの（A）の本質がプラマーナの対象である場合に、それ（A）とは別のもの（B）も確立されうということはない。なぜなら過大適用となるから。

【仏教】壺とその非存在はまさに以下のようなものである。〔つまり〕一方が確定され

ばもう一方は排除される〔という本質を持つ〕。

【ニヤー学派】それは正しくない。壺と同じように、壺の非存在もプラマーナに基づく
と暫定的にも認められない場合には、‘svabhāvavāda’の余地はないからである。

実に、[A]『なぜなら、実在がプラマーナによって確立される場合には、‘svabhāvavāda’
への依存〔によって、その実在に関する何らかの事柄について説明することができるが〕
しかし、‘svabhāvavāda’への依存だけによって実在が確立されるわけではないからであ
る』(pramāṇasiddhe hi vastuni svabhāvavādālabhanam / na tu svabhāvavādālabhanenaiva
vastuparicchitir)

と述べている君こそがあちこちで勝利の太鼓 (jayadundubhi) 〔を叩いている〕。

[Pramāṇa]vārttikāḥkārāにおいて〔次のように〕述べられている。

[B]「対論者が〔立論者〕自身の認めるものをおよそ何であれ述べた後で、そのことに
関して〔立論者を〕解答不能にさせる。〔その場合、立論者は〕『実在の本質によって』
(vastusvabhāvaiḥ) とこのように述べるべきである。その場合には〔そのように〕答える
者は誰でも勝者となろう」(yatkiñcid ātmābhimatam vidhāya niruttaras tatra kṛtaḥ pareṇa /
vastusvabhāvair iti vācyam itthaṁ tadottaram syād vijayī samastāḥ //)

まず、[A]の段落は、以下のVCからの引用である。

VC31*, 1-3: yad api syād etad⁴⁾ ityādi valgitam tad api niḥsāram / pramāṇasiddhe hi rūpe svabhā-
vāvalambanam / na tu svabhāvavādabalenaiva vasturūpavyavasthā⁵⁾ /

『以下のように考えるかもしれない』云々と〔ヴァーチャスパティミシュラが〕吹聴
したこともまた無価値である。なぜなら、〔実在の〕本質(rūpa⁶⁾)がプラマーナによって
確立される場合には、本質への依存〔によって、その実在に関する何らかの事柄につい
て説明することができる〕。しかし、‘svabhāvavāda’だけによって、実在の本質が確定さ
れるわけではないからである』

そして、[B]の段落が、以下のPVAからの引用である。

PVA35, 14-16 (Tib.: D30b5-6; P36a3-4): yatkiñcid ātmābhimatavidhāva(nya) niruttaras tatra kṛ-
taṁ (?taḥ taduttaram vastusvabhā)vair iha vācyam (/) itthaṁ tathottaram syād vijayī samastāḥ /
bdag nyid mngon 'dod 'ga' zhig bsgrub byas pa //

de la gzhan gyis lan med byas pa na //

dngos po'i rang bzhin zhes de'i lan brjod pas //

de ltas thams cad rgyal bar 'gyur ba yin //

PVAのサンスクリットテキストは刊本の表記そのままを挙げている。サンスク
リット写本では当該箇所殆どがかすれているために、文字の判読が非常に困難
である。校訂者のサーンクリティヤーナは、対応するチベット訳を参照して、

上に挙げたテキストを想定している。また、NVTP では偈として引用されているが、刊本では偈として認知されていない。この PVA は、既に述べたように、ĪSD にも引用される。また、年代的に、プラジュニャーカラグプタとラトナキールティの間に位置する、パーサルヴァジュニャの *Nyāyabhūṣaṇa* (NBhūṣ) にも、この PVA が引用されている。そこで、以下にそれらを見ることにしたい。

2. まず、NBhūṣ に見られるものは以下の通りである。

NBhūṣ 471, 6-7: yatkiṃcid abhidhāya niruttaras tatra kṛtaḥ pareṇa vastusvabhāvair ityādyuttaram uktvā tiṣṭhet tataḥ sarvo 'pi vijayī syād iti /

「およそ何であれ〔立論者の説を〕対論者が述べた後で、その〔立論者の説〕に関して、〔立論者を〕解答不能にする。〔立論者が〕『実在の本質によって』云々の答を述べたままで〔それ以上の答を与えないとすれば〕、その場合、〔そのように答える者は〕誰でも勝者となろう」

NBhūṣ でも、偈として認知されていないが、内容的には NVTP に引用されるものと基本的に一致している。

また、ĪSD では次のようになっている。

RNA 47, 31-48, 3: yad āhāṅkāṛakāraḥ —

yatkiṃcid ātmābhimateṣaṃ vidhāya niruttaras tatra kṛtaḥ pareṇa /

vastusvabhāvair iti vācyam itthaṃ tathottaraṃ syād vijayī samastaḥ // iti //

アランカーラ作者は次のように述べている。

「対論者がおよそ何であれ〔立論者〕自身の認めるものを述べた後で、その〔立論者の説〕に関して〔立論者自身を〕解答不能にさせる。〔その場合、立論者は〕『実在の本質によって』とこのように述べるべきである。〔立論者が〕そのように答えれば、〔どんな立論者であれ〕誰でも勝者となろう」と。

ĪSD では、偈として引用されており、NVTP に引用される形とほぼ同じである。違いは、d 句における ‘tathottaraṃ’ が NVTP では ‘tadottaraṃ’ となっていることだけである。

このように、当該の PVA のオリジナルテキストが、ラトナキールティやウダヤナが引用する形に近いものである可能性は高いと思われる。

3. 次に、目下の NVTP で用いられている ‘svabhāvavāda’ とは何か、ということについて検討したい。ここで言われている ‘svabhāvavāda’ とは、例えば、*Tatvasaṃgraha* 第四章に見られるような、いわゆる「自然発生論」や「無因論」⁷⁾ という意味ではなく、むしろ、実在の本質 (vastusvabhāva) を通じて、詰問 (paryanuy-

oga) に答えること、という意味であると考えられる。このことは、NVTPにおいて、‘svabhāvacāra’ に関する VC が引用された後で、PVA が引用されていることから明らかである。また、PVA の他の箇所でも、明らかに、詰問とそれに対する答という文脈でこの ‘svabhāvacāra’ が用いられている⁸⁾。ただし、或る事物に関する事柄について、その事物の本質に基づいて説明付けるという点では、ローカヤタ派の言う ‘svabhāvacāra’ と同じものであると考えられるが、ここでは、詰問とその答というように、討論という枠組みがより強く意識されていると思われる。

VC が引用される直前の NVTP では、仏教徒は、壺（実在）と壺の非存在（非実在）に関して、それぞれ、一方が確定されればもう一方が排除されるという本質を持つと述べていた。つまり、仏教徒は「壺の非存在は、このような本質を持つ」というように、‘svabhāvacāra’ を用いて壺の非存在について説明を加えている。この仏教徒の見解に対し、ウダヤナは、壺の非存在がプラマーナに基づいて確定されない場合、つまり非実在である場合には、‘svabhāvacāra’ の余地はない、と述べている。このことを説明するために、ウダヤナは VC を引用している。

VC では、「実在がプラマーナによって確立されている場合には、‘svabhāvacāra’ に依拠してその実在に関する何らかの事柄について説明することができるが、‘svabhāvacāra’ に依拠することだけによって、何かが実在であるかどうかは確定できない」と述べられていた。従って、たとえ仏教徒が ‘svabhāvacāra’ に依拠して壺の非存在について説明するとしても、‘svabhāvacāra’ によって壺の非存在が実在であると確定できない以上、その説明は非実在に関するものであり、無意味なものである。従って、もしも、プラマーナに基づかないもの、つまり非実在 X に関して、「X の持つ本質によって、こうなのだ」と述べることが妥当とするなら、恣意的に自説を確立することが可能となり、如何なる討論においても、勝利することが可能となる。

また、何か或る事柄に関して「それはなぜか」と詰問された時に、「それは本質によってそうなのだ」と答える場合にも、そのように答える者は勝者となる。このことが PVA では、「対論者の詰問によって、解答不能となった立論者は、『本質によって』と答えるべし。そう答えれば誰でも討論で勝利できるだろう」と皮肉を込めて述べられている。

4. ウダヤナは、‘svabhāvacāra’ だけに基づいて「壺の非存在」という非実在について説明を与える仏教徒に対し、そのことの妥当性を否定する内容の VC を引

用する。さらに、「*‘svabhāvavāda’* に依存して詰問に答えるならば、どんな討論においても勝利することになる」という PVA を引用することによって、「君達仏教徒の述べていることは、既にプラジュニャーカラグプタによって皮肉を込めて批判されている」というように、仏教徒に対して痛烈な皮肉を込めて批判する。このことが、ウダヤナが NVTP において PVA を引用する意図であると考えられる。

略号 $\bar{A}TV = \bar{A}imatattvaviveka$ (Udayana) : M.V.Dvivedin and P.L.S. Dravida ed., Calcutta, 1907-39 (reprint 1986). NBhūṣ = *Nyāyabhūṣaṇa* (Bhāsarvajña) : Svāmī Yogindrānanda ed., Varanasi, 1969. NVTP₁ = *Nyāyavārttikatātparyapariśuddhi* (Udayana) : Anantalal Thakur ed., New Delhi, 1996. NVTP₂ = *Nyāyavārttikatātparyapariśuddhi* (Udayana) : Anantalal Thakur ed., Darbhanga, 1967. NVTṭ = *Nyāyavārttikatātparyāṭikā* (Vācaspatiśīra) : Anantalal Thakur ed., New Delhi, 1996. PVA = *Pramānavārttikālaṃkāra* (Prajñākaraḡupta) : R. Sāṅkṛtyāyana ed., Patna, 1953. RNA = *Ratnakīrtinibandhāvalī*, ed. by Anantalal Thakur, Patna, 1957 (2nd ed. 1975). VC = *Vyāptīcārcā* (Jñānaśrimitra) : see Lasic[2000a]. VyN = *Vyāptinirṇaya* (Ratnakīrti) : see Lasic[2000b]. 生井 [1996]: 『輪廻の論証 仏教論理学派による唯物論批判』東方出版. Lasic[2000a]: *Jñānaśrimitras Vyāptīcārcā*, Sanskrittext, Übersetzung, Analyse. Wien: Wiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde Heft 48. Lasic[2000b]: *Ratnakīrtis Vyāptinirṇaya*, Sanskrittext, Übersetzung, Analyse. Wien: Wiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde Heft 49.

- 1) $\bar{A}TV$ 中の、「存在性に拠る〔刹那滅〕論証」(*sattvānumāna*), 「否定的遍充関係」(*vyatirekavyāpti*) 批判のセクションが引用されている。当該の $\bar{A}TV$ と NVTP の対応関係は以下の通りである。 $\bar{A}TV$ 178,7-220,8 = NVTP₁ 195,10-17; NVTP₂ 340,21-345,23.
- 2) VC が NVTP に引用されていることは, Lasic[2000a: 31*] が既に指摘している。
- 3) NVTP₁ 199,22-200,11; NVTP₂ 344,13-23.
- 4) Lasic[2000a: 61] によると, これは NVTṭ 136,3 以下を指す。
- 5) Cf. VyN 14*, 1-3.
- 6) この ‘*rūpa*’ を Lasic[2000a: 121] は「事物」(*Ding*) と訳すが, 対応する $\bar{A}TV$, NVTP, さらに VC の直後の文章の内容から, 「〔実在の〕本質」と訳した。
- 7) 生井 [1996: 16-17, 157ff.] を参照。
- 8) See PVA 35,5-6: *nanv idrṣī tasya (śaktiḥ) sarvadarśanānugrāhakarūpā kutah kārāṇād āgatā / atra vastusvabhāvair uttaram vācyaṃ yata evaṃ bhavanti cet /* (『反論』彼 (イーシュヴァラ) の持つ, このような, 一切を見, 把握する能力は如何なる原因に由来するのだろうか. この〔詰問〕に関しては実在の本質によって答が述べられるべきである。なぜなら, 〔実在の本質は〕そのようなものであるから。 Cf. PVA 547,11-15; PVA 641,19-20.

〈キーワード〉 ウダヤナ プラジュニャーカラグプタ *svabhāvavāda*

(広島大学大学院)

pressed in ablative form.

From these points, we can conclude that Praśastapāda's epistemology parallels the distinction of causes in his causality.

60. Similes used by Śaṅkara: the simile on the ocean

Tatsuoki KATŌ

This article studies a simile of the ocean found in the *Yogaśāstravivaraṇa* with a view to comparative research. I research similar similes discovered in Śaṅkara's works, in order to solve the vexed problem of the authorship of the *Yogaśāstravivaraṇa*.

61. Udayana and Prajñākaragupta: A Sanskrit Fragment of the *Pramāṇavārttikālaṃkāra* Found in the *Nyāyavārttikatātparyapariśuddhi*

Kōji EZAKI

Both in Udayana's *Nyāyavārttikatātparyapariśuddhi* (NVTP) and in Ratnakīrti's *Īśvarasādhanaśāstra* (ĪSD), the following Sanskrit fragment of Prajñākaragupta's *Pramāṇavārttikālaṃkāra* (PVA) is found:

yatkincid ātmābhimataṃ vidhāya niruttaras tatra kṛtaḥ pareṇa /
vastusvabhāvair iti vācyam itthaṃ tadottaraṃ [ĪSD: tathottaraṃ] syād vijayī sa-
mastaḥ //

While Prajñākaragupta states this verse and Ratnakīrti quotes it in the context of the refutation of Naiyāyikas' proof of the existence of God (*īśvara*), Udayana refers to it in the context of the refutation of the Buddhist view of unreality. The question arises: What is Udayana's intention in quoting the passage from PVA?

The key to the answer to this question is the word '*svabhāvavāda*', which occurs in the passage of Jñānaśrīmitra's *Vyāptīcarcā* (VC) or Ratnakīrti's *Vyāptinirṇaya* that is cited by Udayana in his NVTP immediately before the citation of the present verse of PVA. The word '*svabhāvavāda*' in the very passage should be taken as signifying 'to speak of the essence of a thing' or

‘to explain about a thing in terms of its own essence’ rather than ‘naturalism’ as held by Cārvākas. It is to be noted that in the given context the word ‘*svabhāvavāda*’ really means ‘to answer the question raised by an opponent, in terms of the essence of a thing, in a debate’ (*vastusvabhāvair uttaram vācyaṃ*).

In NVTP a Buddhist opponent explains the absence of a pot (*ghaṭābhāva*), which is an unreal entity for him, resorting to this ‘*svabhāvavāda*’. In VC, however, Jñānaśrīmitra says that one can resort to the ‘*svabhāvavāda*’ only with reference to a real entity. In PVA, in addition, Prajñākara Gupta says with irony that when a proponent is hard-pressed for an answer to the question raised by an opponent, the proponent should rely on the ‘*svabhāvavāda*’, which gives him victory.

Thus it is clear that Udayana quotes the verse of PVA together with the passage of VC with the intention of refuting the Buddhist view of an unreal entity, with irony and sarcasm.

62. The Development of the Meaning of the Word “*bodhisattva*”: From “the one who has *bodhi* as his essence” (*sattva*) to “a sentient being (*sattva*) seeking for *bodhi*”

Sadahiko KARIYA

Jātaka texts say that Śākyamuni Buddha accumulated a good amount of merit through his acts such as making offerings as a layman in his previous life. And it is understood that as a reward, he became a buddha in this life. But under the theory of reincarnation, a layman who accumulates merits, in general, would be born as a man or a deity in his next life, and he could not become a buddha liberated from reincarnation. To solve this problem, monks (*bhikṣus*) thought that the Buddha had *bodhi* as his essence (*sattva*), namely, he was a “*bodhisattva*.” Therefore we should say that the original meaning of “*bodhisattva*” was “the one who has *bodhi* as his essence (*sattva*).”

Later, some monks who were worried about the trends of the age that the “True Doctrine (*saddharma*) is dying out” insisted that the purpose of Buddhism was not to become an arhat but to become a buddha, and they pro-